

修学旅行と個人旅行の経験と構成

笠原 ちなみ

キーワード：修学旅行，個人旅行，モデルコース，小学校

1. 研究の目的と方法

私は旅行に行くことが大好きだ。旅行は私に人との出会い，机上では得ることのできない知識，感動を与えてくれる。これまで時折，時間を見つけては様々な場所に足を運んできた。いくつかの行き先でたまに修学旅行生とみられる子どもたちを見かけることがある。「この子たちはどこから，何をしたくて来ているのだろうか。またどんなことを考えているのだろうか。」とよく思いをはせることがある。

修学旅行は学校行事の中でも一大イベントだというのが私の修学旅行に対するイメージだ。その修学旅行に，私は中学時代2回行った。理由は転校である。1回目は埼玉県川越市から「大阪・京都・奈良」へ行った。2回目の修学旅行は大阪府吹田市から「和歌山」に行った。また，私は埼玉県の小学校で「日光」に行ったが，3歳下の弟は，大阪の小学校で「広島」に行っている。しかし母や祖母は大阪府出身だが，小学校のときの修学旅行は「三重」に行ったと聞かされた。出発地の県や地域によって，また時代によって，修学旅行の行き先に違いがあるということに気づく。そこから修学旅行の始まりや，今現在修学旅行がどのような体系をとっているのかに疑問をもつようになり，調べてみることにした。

また，私は4年時の実習で，今まで参加者の側でしか見たことがなかった運動会を，主催者の側から体験した。子どもの頃はただ楽しいだけだったが，子どもたちが楽しい運動会を過ごせるように，本番で良い成果が出せるようにと先生たちが陰で動いているのだと改めて気づかされた。この体験から，同じ学校行事でも，参加者の立場から見ると，主催者から見ると見え方，感じ方が全く違うのではないかということに気づいた。それは修学旅行にも言えることである。参加者の修学旅行に対する思いや見方と，主催者の修学旅行に対する思いや見方を調査し，二つの視点から修学旅行の実際を明らかにしたい。

本研究の目的は，学校教育の中で，修学旅行とりわけ，小学校の修学旅行に着目し，これまでを振り返り，これからを展望することである。また，修学旅行を参加者，主催者など，様々な視点から見たい。

- ・修学旅行の始まりから現在に至るまでを理解するため，文献を読む。
- ・修学旅行の実態を把握するため，統計データを図表に表し，分析する。
- ・修学旅行について，参加者，主催者の生の声を聞くため，聞き取り調査をする。
- ・自分の旅行歴を振り返り，修学旅行が個人旅行にどのような影響を与えているか調査する。

2. 修学旅行のこれまで

(1) 学校教育における修学旅行

日本における修学旅行の発生は自然発生的なものであったが、明治中期に至り、兵式体操が修学旅行に組み入れられ、見学・見物併用型が一般的となる。その後、兵式体操が分離され、おおむね現在の修学旅行となった。日清・日露戦争後、大陸政策の発展とともに、国民の海外への関心も高まり、満韓修学旅行時代を迎え、大正・昭和初期まで続いた。

大正から昭和にかけては戦時体制下の修学旅行である。国家主義的な社会思潮の影響を受けて、敬神思想、国防意識の反映が修学旅行にもみられる。このころの修学旅行は国防意識の普及のため、軍関係も学校に協力し、軍艦や軍事施設の見学が増えてくる。また、軍艦・軍事施設の見学とともに、修学旅行の目的は伊勢神宮や明治神宮を中心とする神社仏閣参拝と皇居遥拝にむけられ、天皇制イデオロギー注入の手段とされて、軍国主義的なものへと傾斜していった。1941(昭和16)年8月、学生生徒、団体旅客等の鉄道運賃割引停止によって、修学旅行も中止の方向へ向かっていった。

修学旅行が再び実施されるようになるのは終戦後である。1946(昭和21)年には、戦後の極度の困窮・混迷の生活の中で、食糧持参による戦後の修学旅行の復活がなされている。1958(昭和33)年10月1日、小・中学校学習指導要領の告示により、修学旅行の教育課程への位置づけも明確にされ、修学旅行の改善向上が一段と推進されることとなる。また、高度経済成長の時代に入り、1959(昭和34)年4月7日の文部省通達では、修学旅行等の教育課程への位置づけの明確化に伴い、教育的意義に則する適正・安全な実施・指導の徹底、ならびに国庫補助の開始に伴う全員参加の配慮を支持することとなった。

1977(昭和52)年7月23日の小・中学校学習指導要領告示、1978(昭和53)年8月30日の高等学校学習指導要領告示により、所謂「ゆとり教育」が推進されることとなった。この学習指導要領改訂では、修学旅行に関して、中学校の「修学旅行的行事」を「旅行的行事」に改称、高校の「各教科以外の教育活動」を「特別活動」の領域とし、修学旅行は中学・高校とも特別活動の「旅行的行事」に統一された。これは、自主的・実践的・体験的な活動としての修学旅行の個性化・多様化に対応するためである。

1985(昭和60)年4月26日、文部省は全国の公立小学校・中学校・高等学校約39,000校の特別活動実施状況調査を実施した。それによると、1984(昭和59)年度の修学旅行実施率は、小学校84.7%、中学校96.5%、高等学校89.3%で極めて高く、改めて修学旅行が重要な教育活動として認識されていることがうかがえる。

(2) 現代の修学旅行

現行の小学校学習指導要領は、2008(平成20)年に告示され、2011(平成23)年より完全実施されている。そこで修学旅行は、第6章特別活動(4)遠足・集団宿泊行事に位置付けられている。

特別活動の目標は「望ましい集団生活を通じて、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主性、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」とある。また、遠足・集団宿泊行事の内容は「自然の中での集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあって、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについて望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」としている。

そこから、修学旅行の教育的意義は次の5点にあると考えられる。

- ① 郷土社会では得られない直接体験の機会を与える。
- ② 教科学習の興味を発展充実させる。
- ③ 国民教育的見地から、国の文化の中心地や重要地を見聞する機会を与える。

- ④他人との共同生活の経験（集団行動訓練），保健教育，安全教育など，心身の訓練をする。
- ⑤学校生活の印象を豊かにする。

3. 修学旅行の実際

（1）参加者から見る修学旅行

修学旅行について，参加者の生の声を聞くため，兵庫教育大学の学生に聞き取り調査をした。対象は，兵庫県の小学校から修学旅行に行った5人の学生である。聞き取り調査の結果，兵庫県の小学校は主に，三重，奈良，京都，広島の4つの地域を修学旅行先に設定していることがわかった。兵庫県修学旅行実施基準の旅行方面の欄に，伊勢・奈良・京都・広島等と記載されていることが主な要因であると考えられるが，小学校の場合，実施日数が大抵1泊2日と短いため，あまり長い時間を移動にあてられないこと，移動手段として飛行機が認められておらず，バスや新幹線に限られることも理由である。時期はみな，5月，6月，10月，11月とばらばらであるが，学期初めや学期末，また，3学期などを除いた時期に実施されている。

私たちはこれから教員になって，修学旅行の主催者の立場に立つことになる。そこで，今まで参加者の立場でしか見てこなかった修学旅行を主催者の立場で見たとき，何を感じるか聞いてみた。すると，ほとんどの学生から「普段できないことを体験させてやりたい」という回答を得た。修学旅行は人生の中で小・中・高の3回しかないイベントだ。しかも修学旅行の時間というのは，学校生活の思い出の大部分を占めるものになる。だからこそ，その限られた時間の中で，必ず何かしらの学びを得られるものにならなければならないと考える。そのためにも，行って「楽しかった」で終わる修学旅行にはしたくない。事前学習をしっかりとやって，体験・学習活動を充実させることはもちろん，おろそかになりがちな事後学習をきちんとすることが必要であると考えた学生が多かったのが印象的だ。また「もし自分の好きな所へ子どもたちを連れていけるならどこへ連れて行くか」と聞いてみたところ，「都会の子どもたちに昔の暮らしをさせてやりたい」や「沖縄の離島に連れて行って，都会では到底見ることのできないような素晴らしい景色を見せてやりたい」など，やはり修学旅行を主催者の視点で見たとき，「普段体験できないことを体験させてやりたい」という考えが根底にあるようだ。

つまり，参加者は修学旅行で「何をするか」が重要であると考えている。それは修学旅行を修学旅行前・修学旅行中・修学旅行後の3段階に分けたとき，修学旅行中に最も重きを置いているということである。

（2）主催者から見る修学旅行

修学旅行について，主催者の生の声を聞くため，兵庫県篠山市の小学校に務めている教員に話を聞いた。この教員は現任の小学校で2回の修学旅行にかかわっている。1回目は篠山市から奈良と京都へ，2回目は篠山市から広島へ行った。

修学旅行の計画はまず，前年の企画を検討し，どこに行くかを決めるところから始まる。行き先が学年団の間でまとまると，それが実現可能かを校長と相談し，大丈夫であれば旅行会社へ依頼する。次に実施内容を決めるのだが，どこに行って何をしたいかという大まかな核の部分は学校側が決め，それを旅行会社に伝えることで，周辺の観光プランや移動など，細かいところを旅行会社が詰めてくれる。そうして話し合いを重ね，修学旅行の計画が完成する。

また，修学旅行に行くにあたって，修学旅行の目的が何かをはっきりさせることが一番重要なことである。子どもたちが何を学びに行くかがあやふやなままだと，子どもたちは

旅行先で何に着目して活動をすればいいかわからない。結果、何も感じるものがないまま帰ってくるようになってしまう。それを阻止するためにも事前学習が大切だ。事前学習をし、子どもたちの旅行先での視点を定めることが、旅行先での学びを得るためには必要不可欠である。

主催者の立場から修学旅行を見たとき、修学旅行の計画や、子どもたちの事前学習など、修学旅行前の段階がいちばん重要だということがわかる。しかし参加者であった学生は、修学旅行に行って何をするかという活動の内容、つまり修学旅行中が最も重要であると考えていた。つまり、参加者と主催者では修学旅行のどこに重きを置くかが異なることがわかる。

4. 修学旅行のこれから

(1) 私の旅行体験

私は大学に入学し、自分が旅行好きであることに気づいた。私の旅行好きのもとをたどると、幼少期から両親に連れられて、様々な所へ足を運んでいた、運ばされていたからであるに違いない。そこで、0歳～6歳（就学前）・7歳～12歳（小学校期）・13歳～18歳（中学・高校期）・19歳～21歳（大学期）の旅行先の都道府県と行った回数、内容を調べてみた。

0歳～6歳（就学前）には、このころの居住地である埼玉県を中心とした周辺地域と、祖父母のいる大阪府・京都府が主な旅行先となっている。また、さすがにこのころの旅行は日帰りが多く、宿泊をしたとしても1泊2日である。0歳～6歳（就学前）の記憶はあまり私の中にないが、このころから休日は暇があれば家族で出かける習慣が形成されていた。私が、休日になるとどこかへ出かけたくなったり、休日にただ家で何もせずに過ごすのがもったいないと感じるのは、小さいころからのこうした習慣が要因である。

次に、7歳～12歳（小学校期）の旅行歴を見る。このころの旅行先も居住地の埼玉県を中心とした周辺地域が主な旅行先となっているが、0歳～6歳（就学前）は居住地の埼玉県が最も多くなっているのに対し、7歳～12歳（小学校期）は、埼玉県の周辺地域へ足を運ぶことが多くなっている。また、0歳～6歳（就学前）と比べて、7歳～12歳（小学校期）は宿泊を伴う旅行が増加している。このころの旅行内容にアウトドアやスキーなどの体験的・活動的内容が多いことは、その後、私の活動的な性格を形成するにおいて、大きな影響を与えていることに疑いの余地はない。

さらにこの時期、人生ではじめての修学旅行を経験する。行き先は栃木県の日光とその周辺であった。家族で様々な所に足を運んできたが、家族ではない大勢の学校の友人たちと、1泊2日寝食を共にするというのははじめての経験であり、今でも小学校時代の印象の大部分を占める行事である。

13歳～18歳（中学・高校期）は、1年の大部分を部活動（バレーボール）に費やし、休日もなかったため、旅行らしい旅行にはほとんど出かけていない。しかしだからこそ、この時期の修学旅行は、部活の思い出しかない中学・高校時代に、いやがうえにも強い印象を残している。

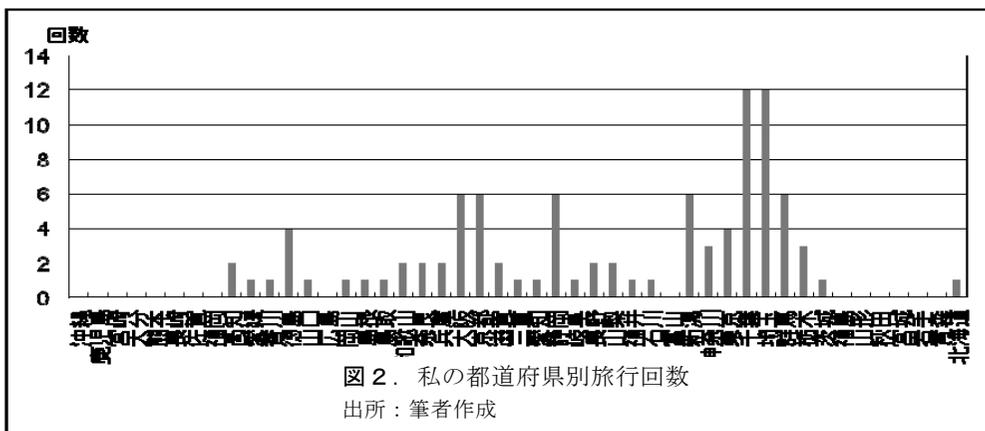
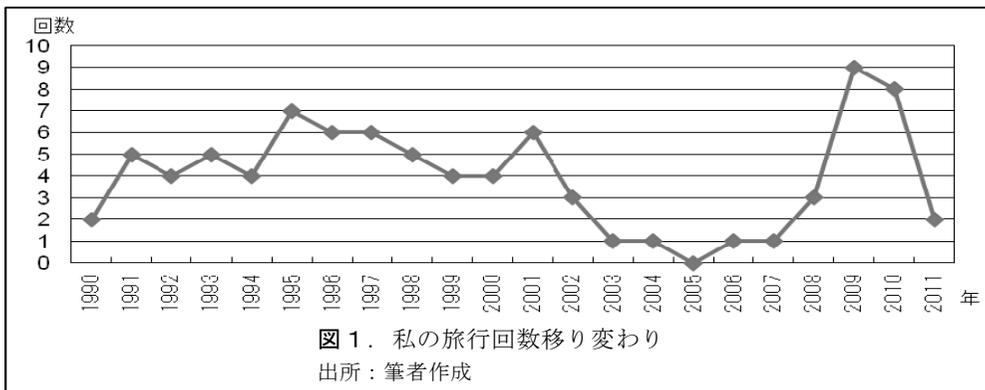
私は転校先の中学校で中学2回目の修学旅行を体験した。この修学旅行によって、新しい学校の友人と親睦を深め、クラスに馴染むことができた。修学旅行は、よりよい人間関係を形成することができる場であると断言する。

19歳～21歳（大学期）には時間的にも金銭的にも余裕が出てきたこと、自分の車を持ったことにより、行動範囲が広がり、さらに様々な県に足を運ぶことができるようになった。旅行先での行動を調べてみると、寺社・史跡・文化財などの見学や、伝統的町並みや建造物群保存地区の見学がほとんどを占めている。これは、修学旅行の実施内容の上位二

つと同じである。その県の主要な観光地が、寺社・史跡・文化財や、伝統的町並み・建造物群保存地区であるということも考えられるが、やはり、修学旅行で寺社や文化財に触れ、興味を抱いたこと、また、修学旅行のイメージが、その後の私の旅行のイメージとなり、旅行といえば寺社や文化財を見てまわるものであるという刷り込みの果てなのかもしれない。

私は19歳～21歳（大学期）に今まで修学旅行で訪れた場所をもう一度訪れなおした。大学2年生の夏に大阪の中学校の修学旅行で行った和歌山へ、秋に埼玉の中学校から行った京都と奈良へ、大学4年生の秋に埼玉の小学校から行った栃木県の日光へそれぞれ行った。あらためて訪れてみると、修学旅行で感じた高揚感が再び湧き上がってくるのを感じ、興奮を抑えられなかった。その場所に行ってみると、当時の記憶が隅々まで思い起こされ、修学旅行の思い出の強さを感じた。

私の個人旅行の全体像を振り返ってみたい。旅行回数（図1）は、小学校入学前の1995年に一度、ピークに達する。これは私が成長し、ある程度の活動が可能になったこと、また小学校に入学すると旅行に出かけられなくなると考えた両親が旅行をたくさん企画したからである。2001年に旅行が増えているのも、中学校入学前の時期に当たることから、同様の理由である。そこから中学校入学とともに減少し、高校を卒業するまでの6年間は、部活動（バレーボール）に打ち込んでいるため、ほとんど旅行に行っていない。大学生活に入り、大学2年生のときに最も多くの旅行に出かけている。2008年11月に自分の車を持ったことで、旅行に出かけやすくなったことが要因である。



旅行回数を都道府県別に見ると(図2), 0歳~6歳(就学前)と7歳~12歳(小学校期)の旅行回数が多かった時期に居住地であった, 埼玉県とその周辺地域に最も多く出かけている。関東から近畿, 中国・四国地方にかけては万遍なく多くの回数訪れているが, 九州と東北地方には一度も訪れていない。その理由は, 就学前と小学校期の居住地である埼玉県と, 中学・高校期, 大学期の居住地である大阪府・兵庫県から遠いところであるため, 足を運ぶ機会がなかったからである。

(2) モデルコースの立案

現在, 各学校で実施されている修学旅行では, 体験学習が多く取り入れられている。体験学習の内容は様々であるが, 本研究では次のように分類してみた。

- i) 歴史文化体験 ①歴史文化遺産体験 ②生活歴史文化体験
- ii) 社会体験 ①一般社会・職場体験 ②福祉・ボランティア体験 ③平和学習
④生活文化体験
- iii) 自然環境体験
- iv) 交流体験 ①学校交流体験 ②宿泊体験
- v) 自然・スポーツ体験 ①陸 ②海・湖・川

表1. 奈良県明日香村の歴史文化体験を目的とした小学校修学旅行のモデルコース

日	時	行先・交通	内容
1日	8:00	学校	集合
	8:05~8:15		出発式
	8:20	バス	出発
	10:30	奈良県明日香村	飛鳥歴史公園到着
	10:45~12:00	高松塚古墳から 甘樫丘展望台へ	班行動で史跡を巡りながら甘樫丘を目指す
	12:10~13:00		昼食
	13:05~14:30	甘樫丘展望台から 石舞台古墳へ	班行動で史跡を巡りながら石舞台古墳を目指す
	14:40	バス	体験場所へ移動
	15:50~16:50	奈良県奈良市 歴史体験工房楽古	歴史体験工房楽古到着 ①埴輪づくり②勾玉づくり③土笛づくり のうち一つを選んで歴史体験
	17:00	バス	ホテルへ
	2日	9:00	バス
9:30		東大寺	東大寺着
9:45~10:15		東大寺	東大寺・大仏殿見学
10:30~11:00		奈良公園	奈良公園散策
11:30~12:30			昼食
12:40		バス	移動
13:10		平城京	平城京着
13:15~15:15			平城京見学
15:20		バス	移動
17:30	学校	解散	

出所:筆者作成

この中から、

- i) 歴史文化体験 ①歴史文化遺産体験
- v) 自然・スポーツ体験 ②海・湖・川

の二つについて、兵庫県の小学校を主催者とした修学旅行のモデルコースを提案する（表1、表2）。実施学年と実施期間は、どちらも第6学年6月を想定している。

まず、兵庫県の小学校の平成23年度修学旅行実施基準概要を確認したところ、「旅行期間」「旅費」「実施学年」はそれぞれの市町村の教育委員会の定める基準によるとされている。また、「参加率」は原則として全員参加、「旅行方面」は伊勢・奈良・京都・広島等である。

- i) 歴史文化体験 ①歴史文化遺産体験 奈良県明日香村

テーマ：明日香村探検！飛鳥時代を体験しよう

子どもたちに学ばせたいこと：学習した歴史の遺産が現在まで残っていること

子どもたちは社会科の授業で飛鳥時代と奈良時代を学習したばかりである。そこで学習した知識をさらに定着させるため、飛鳥時代や奈良時代の建造物・史跡が数多く残る明日香村へ出かける。事前に班ごとに散策コースを作成し、当日はそれに基づき班別に明日香村を散策し、文化財や史跡に触れ、教科書ではない、実物を見ることによって、さらに飛鳥時代と奈良時代を近くに感じられるようにする。

難点は、班行動ということ、安全対策が難しいことだ。散策範囲から抜け出し、迷子にならないよう注意も必要である。

- v) 自然・スポーツ体験 ②海・湖・川 和歌山県南紀

テーマ：和歌山でほんまもん体験！

子どもたちに学ばせたいこと：

きれいな海があり、それを守っていく使命感

普段見ることのない景色、出来ない体験から得られる感動

自然の中で学ぶ命の大切さ

和歌山県は県の取り組みとして地元の漁師らと協力し、「ほんまもん体験」と称する様々な体験活動を運営し、修学旅行の誘致に力を注いでいる。水族館飼育体験では日本でも有数の美しい水族館と言われるマリンパビリオンで、ガラス越しに海の生物を見るだけでなく、バックヤード見学や餌やりを体験し、専門学芸員の解説を聞く。スノーケリングはスタッフが生物の名前や生態をガイドしながら海の中を案内してくれる。和歌山県の海には珊瑚も生息しており、とてもきれいな海が広がっている。きれいな海や海辺の生物に触れることで、命の大切さや、きれいな海を守る使命感を育みたい。

難点は、まず兵庫県から和歌山県まで距離があり、移動にたくさん時間を取られ、活動時間が限られてしまうことだ。また、海に入るので安全対策もしっかりしなければならない。

5. まとめ

本研究では、学校教育の中で、修学旅行とりわけ、小学校の修学旅行に着目し、これまでを振り返り、これからを展望した。また、修学旅行を参加者、主催者など様々な視点から考察した。

まず、修学旅行の始まりから現在に至るまでの特徴を調べた。その結果、修学旅行の発

表 2. 和歌山県南紀の自然・スポーツ体験を目的とした小学校修学旅行のモデルコース

日	時	行先・交通	内容
1 日	8:00	学校	集合
	8:20	バス	出発
	12:20	熊野那智大社	到着
	12:30~13:00	昼食	
	13:10~16:00	那智の滝 熊野古道	那智の滝見学 熊野古道散策
	16:10	バス	ホテルへ
2 日	8:00	バス	ホテル発
	9:00~11:00	串本海中公園	水族館飼育体験
	11:05~12:00	昼食	
	12:10~14:10	串本海中公園	スノーケリング体験
	14:30	バス	学校へ出発
	18:30	学校	解散

出所：筆者作成

生は自然発生的なものであったが、兵式体操が修学旅行に組み入れられ、軍隊的師範教育と修学旅行が結びつき発展した。その後、兵式体操が分離され、おおむね現在の修学旅行となったことがわかった。修学旅行は時代に合わせて様々に姿を変えてきたが、発生当時から現在に至るまで、その教育的意義が高く評価され、認められてきたからこそ、修学旅行が実施され続けている。

修学旅行の実際を明らかにするため、参加者の立場として兵庫教育大学の学生に、主催者の立場として現職の教員に聞き取り調査をした。そこから、修学旅行に対して参加者は修学旅行中の体験を重視していること、主催者は修学旅行前の活動が大事だと考えていることがわかり、参加者と主催者で修学旅行の重点の置き場所が違うことが明らかとなった。

修学旅行のこれからを展望するため、まず、個人の旅行体験を振り返った。いやはや修学旅行は個人旅行に大きな影響を及ぼしていること、また、修学旅行の中でも体験活動をした記憶が強く残っていることがわかった。そのうえで、現在の修学旅行には体験活動を取り入れる学校が増えていることを踏まえ、修学旅行のモデルコースを作成した。歴史文化体験（奈良県明日香村）と自然・スポーツ体験（和歌山県南紀）の二つである。最も苦心したのは、子どもたちに何を学ばせたいかということを具体的な活動内容とつなげることである。

参考文献

- 家本芳郎（1981）：『子どもが主役の学校行事（2）遠足・修学旅行』あゆみ出版，233p.
 高文研（1995）：『修学旅行企画読本』高文研，160p.
 鈴木健一（1983）：『修学旅行の理論と実際』ぎょうせい，191p.
 日本私学教育研究所（1973）：『私学の修学旅行上・下』日本私学教育研
 野中春樹（2004）：『生きる力を育てる修学旅行』コモンズ，262p.
 速水栄（1999）：『うれしなつかし修学旅行』ネスコ，256p.
 兵庫県教育委員会編（1955）：『遠足・見学・修学旅行』兵庫県教育委員会
 プロ教師の会（2001）：『学校の教育力はどこにあるのか』洋泉社，253p.
 山口満・安井一郎（1990）：『改訂新版 特別活動と人間形成』学文社，264p.
 歴史教育者協議会編（1992）：『歴史地理教育実践選集 第35巻 クラブ活動・文化活動・修学旅

行』新興出版社，255p.

参考 URL

串本町教育旅行ガイド<URL><http://www.guide-kushimoto.jp/>

全国修学旅行研究協会『平成 20 年度研究調査報告』 「修学旅行の実施状況調査/修学旅行の課題調査」 「教科との関わり方について」

<URL><http://shugakuryoko.com/chosa/kakushu/2008-01-chosa.pdf>

なら修学旅行ガイド<URL><http://www.narasyugaku.jp/>

ニッポンを体感する！地域ならではの旅

<URL><http://tikitabi.com/tikipro/detail/P20091222-o002/>

日本修学旅行協会『教育旅行年報』 「政令指定都市を中心とする主要都市における小学校修学旅行の実態調査」 <URL><http://www.jstb.or.jp/research/pdf/elschool2009.pdf>

日本修学旅行協会『教育旅行年報』 「全国の中学校修学旅行の実態調査」

<URL><http://www.jstb.or.jp/research/pdf/jrhischool2009-2.pdf>

日本修学旅行協会『教育旅行年報』 「都道府県及び政令指定都市における修学旅行実施基準の調査」 <URL>http://www.jstb.or.jp/research/pdf/ki_jyun-h23.pdf

Experience and Composition of School Excursion and Personal Tourism

KASAHARA Chinami

Key Words: School excursion, Personal tourism, Model course, Elementary school